

所感 No. 4

「臨床看護にケアを取り戻そう」

世話人 茂野香おる

「とっても気持ち良くてお風呂につかっているみたいでした。すごくあったかくて気持ちよくて感動的でした。またやって頂きたいと思いました。」「…手をあてられることでさらに温かくなりマッサージで肩こりや腰痛などが楽になりました。」これは『熱布バックケア』を受けた看護師の感想である。一方、ケアを提供した看護師は「相手と手のひらを通じて、対話している気がします。」「看護師としてケアすることの本当の喜びとやりがいを感じることができました。」と。受け手側には“心地よさ”を、提供者側には“喜びとやりがい”をもたらす、看護師が得意中の得意としていた看護ケアが絶滅しかけている。

1960・70年代に川嶋みどり世話人らが普及した『熱布バックケア』。教科書には『熱布清拭』として紹介されているが、この湯と綿タオルを用いた“自然の回復過程を促す伝統的な看護技術”が医療施設ではほとんど行われなくなっている。2016年看護未来塾設立フォーラムにおいても「臨床看護からケアが失われてもよいのか」と、川嶋世話人から問題提起されたが、薄っぺらな使い捨ての不織布おしぼりがベッドサイドを占拠してしまっているのが現実である。最近フェイスタオルサイズ！を謳った大判のものも商品化されているが、厚み・重量の面で不十分なため直ぐに冷めてしまうのはサイズが変わっても同じこと。臨床実習の場面で入院患者に学生が清拭を進めると冬場は決まって断られる。「寒いから」「拭かなくても我慢できる」などの理由である。今や入院患者にとって体を拭く（拭かれる）ことは寒さを耐え忍ぶことになってしまっている。

このような看護ケアの変貌（質の低下）の大きな原因として、医療安全偏重主義が挙げられる。業者による再生綿タオルからの菌検出・院内感染死亡事故が報道されたのを契機にすっかり綿タオルは悪者にされてしまった。綿タオルが悪いのではなく、綿タオルの管理上の問題だったのに、それを省みることなく数年も経たないうちに使い捨ておしぼりが瞬く間に全国に浸透していった。細菌への暴露という面では安全を勝ち取ることができたのかもしれないが、冒頭のように、患者への心地よさ・安堵感の提供を捨て去り、看護師自身のやりがいもどこかにおいてきてしまったのだ。

使い捨ておしぼりの一般化を憂いる理由がもう一つある。使い捨ておしぼりは環境にも優しくないからだ。使い捨ておしぼりがどれだけの数が使われているのか、その数は定かでないが、病院だけでなく介護施設でも用いられている。国内の病院の病床数約165万床、仮にその半数の80万人の入院患者・利用者に使われているとしよう。1日・1人あたり3本使うとして、1日240万枚（仮定）もの使い捨てタオルは廃棄物として処分されることとなる。これらは全て焼却されるものと考えられるが、燃焼による二酸化炭素排出で地球温暖化への道を加速させる要因になっていることは間違いない。さらに、厳重な衛生管理のためのプラスチック製個包装袋が同じ数だけプラごみとして排出されることになる。近年、

プラスチック問題はメディアでもしばしば取り上げられているが、どんなに分別をしたとしてもその多くはリサイクルされずに地球上のどこかに埋め立てられているという。埋め立てても土には還らないし、最悪の場合は海に投棄されマイクロプラスチックとして海を漂うことになる。高温焼却炉で燃焼されたとしても地球温暖化へとつながってしまう。いずれにしてもエコロジーとはかけ離れた存在だ。

世間では、あちらこちらに使い捨て文化からの脱却を図ろうという動きが少しずつみられている。今こそ、地球環境保全の視点からも、看護がどのような道を選択すべきなのか考えていきたい。全てを綿タオルに戻そうと言っているのではない。陰殿部や浸出液のみられる部位には使い捨てタオルは必須であろう。綿タオルの管理方法（使用部位、保管方法、使用後の処理など）を見直すことにより、繰り返し使用することは可能であり、使い捨ておしぼりとの使い分けにより、患者にも、看護師にも、地球環境にも優しい清潔ケアを取り戻せるのではないかと考える。

綿タオル劣性の状況にあっても、心地よさをもたらす『熱布バックケア』を守り抜こう（あるいは、復活させよう）と頑張っている看護師もいる。冒頭の感想を書ってくれた看護師、「自然の回復過程を整える『熱布バックケア』講習会」に参加した人たちだ。「緊張感が解けて、信頼関係が成り立ち、いい患者・看護師関係が築けそう」「夜間不穏の患者さんに効きそう」「術後の患者さんの早期離床が促せるのでは？」など、いろいろな効果を期待しつつ、看護ケアに取り入れようと意気込む看護師の存在は心強い。綿タオルと熱い湯さえあればどこでも簡単にできるケア、しかも、看護の対象に心地よさをもたらす、人間の身体が備え持つ自然治癒力を引き出すケアを今こそ普及（復活）させていきたい。